

飛鳥井雅有と日記文学

森 田 兼 吉

観がうかがわれると共に、中世の日記文学の性格を明らかにする上でも重要な足がかりを与えてくれるのである。

『嵯峨のかよひ路』は次のように書き起こされている。

すぎにし春のむ月よりあしやの里をすみはなれて、花の宮こに
帰のぼりたれど、はやくよりやまひ身をさらぬものなれば、ち
かきまもりの名のみして、雲井のよそにへだりて、をぐらの
山のふもとにはなる人の山里あれば、こもりて月日をくく
る。いにしへ前中書王のすみ給へるあたりなれば、いとなつか
しくて、宮このすまるも物うくて心をやしなふばかりをとるか
たにてある。かゝる所の秋のあはれはいづくよりも心とまる。
つれづれとながめすぐすに、此あたりに入道大納言為家卿なん
いにしへよりすみけり。この人は代々のむかしよりのしる人な
りければ、おり／＼はなさけをかよはし、たいめんしけり。そ
こより、土左の日記、紫の日記、さらしなの日記、かげるふの日記
などをくこせたり。まことに、をんなの事なれば、幽なり。
おとこもかなにかくらん事、この国のことわざなれば、ゆへ
あり。伊勢物がたりもあきつしまのまじにてぞあるべしなどい

飛鳥井雅有（仁治二年¹一二四一〜正安三年¹一三〇一）には
『無名の記』（文永五年²一二六八初秋より翌年五月まで）『嵯峨
のかよひ路』²（文永六年²一二六九秋より十一月二十八日まで）
『最上の河路』³（文永六年十二月）『都路のわかれ』⁴（建治元年⁵
一二七五秋七月末より八月十六日。歌の付載あり）『春の深山路』
（弘安三年⁵一八二〇正月一日より十二月末まで）の五つのかな書
きの日記紀行が知られている。『春の深山路』が、

都のすまひもおもはずにことしよとせになりぬるにや。すぎに
し三とせの程はうちつゞき心のやみにのみくらされながら、涙
のひま／＼にはいでつかふこともありしかども、よろづものう
くてしるすこともなかりき。

と、数年日記を記さなかつたことへの弁解めいた文から書き起こさ
れていることから考えれば『都路のわかれ』の前後あたりになお他
の作品が書かれていたかもしれない。これら雅有の作品は平安時代
の女流の日記文学を意識して書かれたものであり、雅有の日記文学

ふ。うるはしき事はげに真名にてもありなん。さればその方はさ様にかきぬ、哥がたなどはかやうにこそあらめとおぼゆれば、今よりかきつく。すぎにし方の事をおもひいだしてかきくはふべし。

作品の序として執筆動機を語っている部分である。

文永六年、雅有二十九歳。「無名の記」をも参酌すれば、雅有は正月十日あまりに別邸のあった芦屋から上京。四月下旬から奈良、伊勢に旅し、伊勢(雅有の所領があつた)では長男雅頌が「かりそめとおもひし物を五月雨の日数ふりぬる草枕かな」と長旅の思いを詠じているから、小倉山の麓に移り住んだのは夏の終わりか秋になつてからであらう。近くには歌壇の長老七十二歳の為家が住んでおり、おりおりに情を通わし、会いもした。その為家から「土左日記」以下の日記文学作品が送られた(おそらくは貸与された)のである。肝心なところに虫損があるが、女のことだからかなで書かれているということが述べられていることは疑いがない。雅有はここで日本の言語活動とかな文字との深いかわりに思いを馳せ、男もかなで書く意義を確認する。「うるはしき事」——公的なこと々々儀式ばつたこと々々でも訳せようか——は、たしかに漢字(漢文)で書くのが当然であらう。だから自分もそうしてきた。歌にかかわるようなことはかな書きがふさわしいと思うので、今から書きつけることにする。過ぎ去つたことも書き加えよう、と雅有は述べているのである。「哥がた」について古典文庫本は「歌の入れる文」と注するが、歌まじりの文なら何でも含んでの発言ではない。物語類ならかな書きはむしろ当然で、ここにことわる要もない。「土左

日記」「紫式部日記」「更級日記」「かげろふの日記」などによつて、かなで書くという行為・意味に気づかされたもの——つまり日記文で、それを題材によつて、「うるはしき事」と「哥がた」に分けたものと解される。「すぎにしかたの」以下の文もそれを証している。

ところで、雅有が為家から「土左日記」以下を借り、それに触発されてかな日記を書こうとした「今」とは、文永六年のいつだったのか。「嵯峨のかよひ路」はこの序のあと、

なが月のなかの十日あまり三日の夜なれば、名を得たる月也。

(中略)かゝる所のこよひの月をたゞなをざりにみんこと、いとくちおしかるべしとて、すぐむしなる人をさそひて、みる人も人といひて、かの入道の山さうへゆきぬ。

と続く。この日は月百首の題詠で、題はくじ引きであて、翌朝帰宅。十六日も訪れて「伊勢物語」の不審を問ひ、十七日からは為家の山荘で「源氏物語」の講義が始まつた。この日は若紫までで、十九日は未摘花から花散里、二十日は須磨・明石、二十一日は濡標から蓬生、二十三日は関屋から薄雲といったふうに続けられ、源氏の講義を主軸に、講義を終えての酒宴・連歌という風流の日々が記されている。記述された順序からすれば、為家から「土左日記」以下を借り、かな日記の執筆に着手した「今」は九月十三日以前だったとそれである。しかし、九月十三日に雅有が為家を訪うたときの、あるじいで、よろこぶ。「昔は雲の上の光をのみならひ付き。

中比はむぐらの門にさしこもり侍しかども、猶なまきける人ののづからとひくる人侍しに、いまと成ては、老をにくむにや、

ことゝふ人もなくて、こよひもさびしくながめてひとり侍りつるに、わたり給へるにこそ、さらにむかし恋しくおもひ出る事おほくて、いとゞとめがたき老のなみだになだかき光をさへやつし侍ぬる」とて、ことにけふぜらる。

という為家の喜びようや、傍線部以下の物言いを見ると、それ以前のしかし近い時期に、「おりくはなさげをかよはし、たいめん」していたとは考えにくい。もつともここに記された交情は嗟峨にこもつてからのことではなく、それまでの長い日々のことと無理に解することもできないことはないかもしれないが、それならば『土左日記』以下の貸写はいかにも唐突で一方的なものになってしまふ。

『土左日記』『紫式部日記』などはきわめて貴重な古典籍であり、それを「をこせたり」という厚意は、九月十三日以後の連日の訪問と「源氏物語」の受講、さらには雅有の強い要望（願望）なしには考えられないことであつた。結局、雅有がかな日記類を借り、自分自身でもかな日記執筆に着手したのは九月十三日よりかなり後のことであつたと推測される。「すぎにしかたの事をもおもひいだして、かきくはふべし」とあり、九月十三日からある時点までの記事は、メモの存在などは当然想定しなければならぬが、回想による書き加えだつたということになる。執筆開始時である「今」が九月十三日以前であれば、回想による書き加え部分は「無名の記」をさすことにならざるをえまいが、『無名の記』は一個の独立した作品であり、回想によつて「かきくはふべし」という表現にはなじみにくいだろう。

九月十三日からの日記本文に、雅有は女流日記類の借り受けを書

飛鳥井雅有と日記文学

き記してはいない。序に記したから書かなかつたのかもしれないが、そのために、どこまでが思い出しながらのまとめ書きであり、どこからがその時その折に記されたかはまったくわからない。ただし、その日その時の記述部分を含めて全体的に後に整理の手の加えられたことは確かである。九月二十九日、大井川で秋を惜しむ歌として詠んだ、「九月尽述懐」という題の、

秋つぎきぬ袖は時雨の隙もなしあはれみかさの山の名もがなの歌について「嗟峨のかよひ路」には、

この所にて、をぐら、あらしをばすて、みかさの山をしも心ざす事、たよりなけれど、中将をのぞむころなれば、そこをかごとにしてよめりしかど、いまみればいづれもみなわろし。けつべくや。

とあり、これは明らかにかなり後の注記であつた。『八雲御抄』に「近衛大将 みかさ山。中少将同之」とあるように「みかさ山」は近衛中将の異名としても用いられる。雅有が右中将に任じられたのは五年後の文永十一年九月十日であり（公卿補任弘安元年条）、それ以後の注記であろうか。あるいはそこまで下らないとしても、詠歌当時とはかなり精神的な距離を持っており、「いまみれば、……けつべくや」という書き方からしても、思い出して書き加えている折のものではなく、一旦書いたものを後に整理しているときの補記と解さねばならない。

二

平安時代と鎌倉時代を通して、先行の日記文学に触発されて書き

はじめられたことを作者自身が明記している日記文学は、飛鳥井雅有のものだけである。それでは、雅有の作品はどのようなものであり、平安朝の女派日記文学の伝統とどのようにかかわっているだろうか。また、雅有は、「うるはしき事」と「哥がた」を漢文とかな文で書き分けていたようで、それはきわめて珍しい例であるのだが、その書き分けの実態はどのようなものであつたらうか。

「哥がた」の記述がかな日記であり、「うるはしき事」を漢字で書いたものが漢文日記であることは疑いがない。ただ雅有の場合「うるはしき」とはどのような事柄だったのであろうか。

『春の深山路』の弘安三年二月十日の条には後深草院の御鞠始めの儀のことが記されている。雅有は「そまう猶ことゆかねば」辞退したがたびたびの仰せで参つたのであつた。しかし、雅有はその日の詳細を記していない。

院御ゑぼし・なをしにていでさせ給ぬ。人々おほくまいりあつまれり。露はらひはてゝたせ給。おほせによりて御鞠あげぬ。

このかたのことはれいの日記にしろれば、おほくのこしぬ。この「れいの日記」を、玉井幸助氏のように「普通に男子が書く日記、漢文日記のことである」と解するのは最も自然であろう。しかしそれでは、鞠は「哥がたの日記」にはなく、漢文日記に書くのにふさわしい「うるはしき事」なのだろうか。

飛鳥井雅有の伝については佐々木信綱氏や松原正子氏に詳しい。飛鳥井家の祖藤原頼輔は「藤家蹴鞠祖、本朝蹴鞠一、道之長」(尊卑分脈)といわれる鞠の名手であつた。その孫の雅経も鞠の名手であると共に「新古今和歌集」の撰者ともなる一流の歌人でもあつた。

雅経の孫の雅有もまた和歌と鞠の二道を以て歩むことになる。雅有の鞠の秘伝書「内外三時抄」によれば、彼は五歳から蹴鞠の道に親しみ、七歳で鎌倉幕府の鞠の会に列し、十二歳で勅によって院の鞠の会に召された。後に為家が「十二にて院御鞠にまゐりて、あげまりし、其時も人にすぐれたりといひしぞかし」(嵯峨のかよひ路、九月廿一日)と回想しているほどの名譽であつた。その後の精進ぶりも「内外三時抄」に詳しい。和歌は「続古今和歌集」以来の勅撰歌人であり、弘安三年当時は東宮(伏見天皇)の歌の師であつた。古典研究にも熱心で、「嵯峨のかよひ路」に見られるような為家からの伝授も得て、弘安三年のあの有名な「弘安源氏論議」に参加したときは、具頭に「いまのよには三のくらみ藤原雅有なん源氏のひじりなりける。これは君も臣もみなゆるせるなるべし」(弘安源氏論議跋)と評されたほどである。雅有は鎌倉幕府にも仕えて鎌倉にも家があり、幕府の命令があれば東宮がいくら惜しんでも鎌倉に下らねばならなかつた(春の深山路)。関東でもおそらくはそうであつたらうが、和歌と鞠と古典学の三つが、朝廷に仕える雅有の特技であり、官職は何であれ、ともかくこの三つの道を以て彼は朝廷に仕えたのだといつてよい。そしてこの三つの道こそが、飛鳥井家の子孫に伝えるべきものだったのである。現に雅有の残したかな日記の中核を成すのはこの三つにかかわる記述であつた。

雅有の五つの作品のうち「無名の記」「最上の河路」「都路のわかれ」の三つは紀行を中心に成り立っている。都と鎌倉を何度も往反するならいふ歌人にふさわしい作品だが、彼の都での日常生活を見るには、日次の日記の形をもっている「嵯峨のかよひ路」「春の

『深山路』に及くものはないし、量的にも質的にもこの二作品が他の三作品を圧してもいる。

ただ『嵯峨のかよひ路』の頃と『春の深山路』の頃とは、雅有の生活の基盤は大きく変わっている。『嵯峨のかよひ路』の文永六年当時雅有は二十九歳。前年十一月九日正四位下、十一年前の正嘉二年（一二五八）十二月十四日に任ぜられた左少将はそのままだったと思われる。といってもこの時代の左少将に実質的な職務があるわけではなく、病気のため「ちかきまもり」（近衛左近衛少将）は名のみで「雲井のよそにへだよりて」小倉山の麓で月日を送るという記述はあるが、病気でなくても官廷に占める位置はなかつたらう。

『春の深山路』の弘安三年には四十歳。弘安元年正月六日従三位、同年三月十四日には侍従に任じられていた（以上官位はすべて公卿補任による）。東宮（伏見）の歌の師として重く用いられ『春の深山路』の九月四日の条では、按察使殿（按察使の局）が、

人々おほくほうかうすれども、御師とてありつぐの朝臣（文章博士菅原在嗣）と二人ほどことにふびんにおぼしめさるゝよし、たび々仰あり。ことにこそよりしこう人にすぐれたり。ありがたきことなり。参らぬ日は御つれづれのよし仰ごとあり。……

と語っているほどであった。

『嵯峨のかよひ路』には九月十三日から十一月二十八日までで五十日分が記されている。描かれた内容を分類してみると、

- ・ 為家の中院山荘へ通った日 三二日
- ・ 源氏物語を中心とする古典研究の行われた日 二六日

- ・ 酒宴・管弦等の「あそび」の行われた日 二九日
 - ・ 右のうち白拍子・遊女の登場する日 八日
 - ・ 歌会等で和歌の記載された日 六日
 - ・ 連歌の行われたことのわかる日 一三日
 - ・ 蹴鞠の行われた日 四日
 - ・ 山野を逍遙した日 四日
 - ・ 転任のための運動が記された日 三日
- ということになる。題名どおり嵯峨の為家の山荘通いが中心で、そこで源氏の講義を聞き、終わってから酒を飲み連歌をして飲を尽くすという日々であった。

東宮（春の宮）通いを意味する『春の深山路』は生活基盤の変化を承けて様相を異にする。一カ年のうち記載のある日は一〇九日。旅行記となる十一月十三日以降を除いて都での百日間の記述の内容を整理してみると、

- ・ 東宮・院などに仕出・伺候したり、御幸に供奉したりした日 八七日
 - ・ 和歌を記載した日 一一日
 - ・ 和歌の記載はないが、和歌にかかわる記述のある日 二八日
 - ・ 蹴鞠にかかわる記述のある日（主に三月までに集中） 二二日
 - ・ 古典研究にかかわる記述のある日（六月以降） 一九日
 - ・ 連歌・連句の行われた日 八日
 - ・ 酒宴・遊行・遊び等の行われた日 二一日
- である。東宮などへの精勤ぶりが目につく。古典研究は、為家や阿仏尼から指導を受けていた文永六年の秋とは異り、若い皇太子（十

六歳)への指導である。

遊宴を除けば、和歌と古典研究と鞠が雅有の生活の中心だったことがわかる。そしてこれらの道でほどこした雅有の面目の数々、得意のあれこれが、これらの作品には描かれているのである。「嵯峨のかよひ路」で「源氏物語」の論義が始まった日、為家の指示で講師をつとめた「女あるじ」(阿仏尼)は、

此あるじは千載集の撰者のむまご、新古今新勅撰の撰者の子、
続後撰続古今の撰者也。まらうどは同新古今撰者のむまご、続
古今の作者也。むかしよりの哥人、かたみにをぐら山のなだか
きすみかにやどして、かやうの物がたりのやさしきことどもい
ひて、心をやるさま、ありがたし。此ごろの世の人さはあらじ
など、むかしの人の心ちこそすれ。

と語ったという。阿仏尼の面目躍如たるところとしてよく知られているが、このように詳細に記した雅有の得意瀟灑な姿もじゅうぶん
に読み取れる、ましてこのあたりは当日の記ではなく、書き加えを
後に成した部分のはずである。雅有は為家(時に阿仏尼のことも)
から源氏全巻の講義を得た。また「伊勢物語」の不審については
「つたへおきたることさらにひせずいはる」「みなとひはて」と、
御子左家の秘伝を伝えられた(九月十六日)というし、「古今集」
についても、為家は「家の秘本」を取り出し、「これはきしやうをか
かきて人にみせぬ本なれども、心ざしありがたければさづけたてま
つらん」といった好意を示し、「古今廿巻をならひとをしておくが
きとりぬ」という成果を得た(十一月二七、八日)。古今・伊勢・源
氏という三大古典について、俊成・定家・為家と伝わる教えを得、秘

伝を受けたことは、古典研究者としての雅有の大きな財産であり、
名譽であった。

「春の深山路」では鞠の記事に注目すべきものが多い。まず三月
一日の条。

左大弁宰相がもとより御教書あり。無文のふすべがはのしたう
づはくべきよし也。ことよろこび申ぬ。日ごろのそまうたち
どころにかなふ。ことのはもなし。故武衛つるにそのげちなく
てかなはざりしに、そのほいとげぬれば、この道にをきてはの
ころことなし。車ならねどこのしたうづもかけてすゑの世のい
さめにしつべくぞ。

この日勅許を得た無文のふすべ革の鞆は、雅有の秘伝書「内外三
時抄」には、

無文燻革は中央之黄色也。これ君王の位也。尤道之長老に付べ
し。

とある。「故武衛」とは、左兵衛督(公卿補任)もしくは右兵衛督
(尊卑分脈)であった父教定を指すべく、父の果たせなかつた「そ
まう」(素望)の達せられた喜びが語られている。それは子孫への
鑑にもすべき名譽であった。そして雅有はこの素望達成のため強力
な実力行使をもしている。素望が叶わなければ公式の会では蹴りた
くないという意志表示は大前前からしていたらしい。正月十九日の
東宮の御鞠始めの日、東宮の女房は、

今日御まりはじめなり。御師匠の身ながらたゞざらむこと、ほ
いなかるべし。かつは院の御方よりもしきりに仰あり。いかさ
まにもたつべし。したうづのそまうは、新院の御はからひにて

あれば、かなはずばときはる殿の御所にてこそしさいは申され
め。この御所は別の御ことなれば。

などと雅有に忠告している。前に引いた後深草院の鞠始めの折の辞
退の理由もこの素望のはかどらぬゆえであった。結局東宮御所での
場合は「かつは例もあるによりて、したうづは、かはず、たゞくつば
かりゆひて」出て、人々の目をおどろかした。しかしあげまりをせ
よとの仰せには「そまうもかなはず、心よからねば」弟子の為世
(為家の孫に役を譲り、二三足蹴っただけですぐ席を外している。

そんなわがままが許される実力を有していたのである。二十二日に
会った「当世の有職」二条大納言入道は「したうづはかぬこと、たう
じはかゝりけるとかや」と感じ入るよしであったという。例の「内
外三時抄」にも「轍なくて結構ばかりにて蹴事あり」とある。飛鳥
井家にとって東宮の鞠始めでの雅有の例は轍をはかぬ吉例として伝
えられるべきものであった。

四月二十八日に東宮御所へ参ると、東宮は一昨年末に奏覧された
「統拾遺和歌集」を御覧になっていた。東宮は「このたびいりたる
恋のうたもてのほかか御きた」されたし、女房達はどこの傾城に贈
った歌かはつきり申せと責めたてた。恋歌二に採られた八四八(新
編国歌大観による)の、

入道二品親王家の五十首歌に

侍従雅有

わが袖の涙の色につゆならばときはの杜も猶やそめまし

という歌である。天皇(後宇多)は「中将におそくなりしうれへの
歌」——同集雑春五五一の「中将をのぞみ申してとし久しくなりに
けるに、五月雨のころ人のもとにつかはしける」と題した、

飛鳥井雅有と日記文学

いかにせむわが身ふりゆく五月雨にたのむみかさの山ぞかひな
き

を「口につけらるゝよし」宰相の典侍が披露し、雅有は大いに面目
をほどこしたのであった。

さぐりだいけふけちぐわんなり。(中略) ことのついでにそと
もといふ事日本紀の説を申いるれば御けうあり。よりてあすよ
りしびて古今の御だんぎあるべしとて人数さだめらる。予、
とも頭の朝臣、定成なり。(六月一日)

日本紀(続群書類従本は「日わき」に誤る)の説とは 卷七成務
天皇秋九月の条に見える「山陽曰三影面、山陰曰三背面」を指す。
何だかの賞として、後深草院が御所の塗籠を開かれ、「むかしよりの
かなの日記どもとうでさせ給ひて、日ごろゆかしがるなれば見るべ
きよし仰下さる」(九月十九日)など、例はまだいくらでもあげら
れるが、「春の深山路」には、雅有の得意と名譽の記述があふれて
いるのである。

「うるはしき事はげに真名にてもありなん。さればそのかたはさ
様にかきぬ。哥がたなどはかやうにこそあらめとおぼゆれば、今よ
りかきつく」として書かれた「嵯峨のかよひ路」「春の深山路」に、
実際に歌が記される日はむしろ少い。鞠や古典研究をも含めて雅有
は「哥がた」と称しているのであろう。その「哥がた」は、「うる
はしき事」に対応しているので一見私的な方面と解されそうだが、
和歌・古典研究・鞠の三つは、雅有の場合、表芸であり、身を立てる
ゆえんのものであり、宮廷生活と深くかわるものであった。「春
の深山路」などは公的な生活記録が中心だといってもよい。そして

ここに記された事項は、飛鳥井家にとっても記憶されるべきものだったはずである。

ここでさきに問題にした「れいの日記」の部分にもどらう。「れいの日記にしろせれば」を例の(漢文)日記に記してあるのと、と訳すとして、雅有はなぜ院の御鞆始めのことの詳細を漢文日記の方に記したのだろうか。名譽なことであり、院とかかわることであるから「うるはしき事」を記す漢文日記の方に記したというような解釈は、ここまで考察してきた結果からすれば、まず成立しえない。「春の深山路」には鞆にかかわる記事はきわめて多く、それらの中には院の御鞆始めの日のことよりもっと名譽で子孫に伝えたいようなことがいくつもあるのである。鞆についての詳細な記述も多い。それらに比して院の鞆始めの折のこをととりわけ漢文日記にまわす意味はあったらうか。さらにいえば、この「春の深山路」の記述以外に、漢文日記に記すどんな内容を当時の雅有は持っていたのだろうか。雅有の公にかかわる生活のすべては「春の深山路」に描ききられているように思えるのである。

「れいの日記」とは本当に漢文日記なのか。問題の文をもう一度検討しよう。

このかたのことはれいの日記にしろせれば、おほくのこしぬ。「このかたのこと」とは、この日のことというのではなく、鞆の方面のことという一般論的な言い方である。鞆についてのことなら「春の深山路」に書くのが通例であることはすでに見てきた。次に「れいの日記」を解するために雅有のかな日記から「れいの」とい

「れいの」は、「れんが、れいの事なり」(嵯峨のかよひ路九・二四)の例のように連体修飾語としてのほかに、

川ばたにゐつゝわたし舟待ほどに、あづまぢのすみだ河ならずとも、ことゝふ鳥もがなとうちながめらる。袖ぞれいのわたらぬさきにひぢぬるや。

(春の深山路 一一・一七)

のように、連用修飾語として「いつものように」の意で使われることも多い。中古の日記文学ではこの方が普通の用法である。雅有の日記にもかなり使われている。

。さがはの宿にくるゝ程につきたれば、れいの、きみ、あまども、またわかきあそびどもぐして、しるのゝしる。

(同 一一・二五)

。れいの、きみどもいできて、月あかければ、入海に舟うけて、よもすがらあそぶ。

(無名の記)

。かやつにつきたれば、れいの、あまはしりありく。

(同)

。あるじがたより、れいの、さけとりいでたり。

(嵯峨のかよひ路 一一・二八)

。…よびいださんとて、をのゝ、れいの、いとたけふきあわせ

てまぢゐたるに……

(最上の河路)

等も、「れいの」の後に名詞が来ているけれども、「れいのきみ」、「れいのあま」、「れいのさけ」、「れいのいとたけ」と続くのではなく、中古の日記文学に例の多いように「れいの」で切り、いつものように「れい」によっての意で下文にかかっているとしなければならぬ。

となれば、ここに問題にしている文も、「このかたのことは、れ

いの、日記にしろるれば、おほくのこしぬ」と謠むことは可能であらう。

鞠の方面のことは、いつものように（いつもいつも）ガヨイカ）日記にしろるしているので、多く省略に從った。

というような意味である。院の鞠始めのことながら、あまり気が乗らず、ごく簡単にしか書かなかつたための弁解の辞だととれる。事実この日のことは後にいっさい話題にしておらず、詳しく書くほどのことはなかつたと推察される。こう解してこそさまざまな疑問や矛盾は解消するのである。そして、この解に從えば、ここにいう日記が『春の深山路』そのもの——あるいは自己の他の作品も含めているかもしれないが——であることは、いうまでもない。雅有が「うるはしき事」を記したという漢文日記は、普通の公卿日記の類で、かな日記が書かれた頃は平行して書かれてはいなかつたろう。

三

飛鳥井雅有のかな日記は中古の女流日記文学の影響下に書かれた。もともと雅有は中古の女流文学には深い関心を持っていたようである。為家から「土左の日記、紫の日記」以下が送付されたのも、雅有の関心に應えての好意と見るのが自然である。「無名の記」は為家から日記類を貸与される以前の作である可能性も大きい。「春の深山路」にはそうした雅有の関心が反映して、瀬田の橋では、

さらしなの日記には、昔みかどの御むすめをぬすみて、あづまへ下るものゝ、をはれじとてこのはしをひきたりけりとなむ。

(一一・一三)

と書き、東宮での、東へ下るいとまごいの夜の管絃の遊びの模様などは、

今宵のしぎ中／＼なにとしるしおきがたし。(中略)昔の紫式部ならではたゞの人の心ちをよびがたからんかし。

(一一・一一)

と紫式部を持ち出し、

さやうには清少納言枕さうしに書たる。

(一一・二四)

という文もある。かな日記「源家長日記」の作者が作品執筆後だが定家から「蜻蛉日記、更級日記、隆房卿日記、坂名安を借り出している(明月記寛喜二・六・一七)例もあつて、中世の男性のかなの日記文学の作者達と中古の日記文学のかかわりは興味深い。

しかし、雅有の日記と中古の女流日記文学との懸隔にも注意する必要がある。

平安時代の、われわれが日記文学として扱っている作品は、いずれも回想記で、記録を目的とする漢文日記とは性格を異にしている。

「土左日記」だけは、日次の日記の形を厳守しているが、地理の誤りなどから後にまとめられたことは確かだし、女性を装ったり、貴之自身の歌を作中の何人もの作として分散して記したり、記録としての意味はきわめて薄い。そしてこれらの日記文学が、記録を目的として発達した本来的な日記とはまったく次元が異なるものであることは次第に確認されつつある。わたくしは、最近、

(A) 本来的な記録としての日記

(イ) 漢文体のもの

(ロ) かな書きのもの

日記

(B)創作的意図をもって書かれた作品

(イ)漢文体のもの
(ニ)かな書きのもの

のように図示してみた⁽¹⁾。よく女流日記文学に対応するものとして挙げられる男性の漢文日記——『御堂閑白記』『小右記』『中右記』などは(イ)で、それに対応する女性のかなの日記は『太后御記』のようなものである。(B)のような作品の登場は『土左日記』を嚆矢とする。『土佐日記』はまだ(A)のような日次の記の形態を守っていたのだが、そうした形式の枠を破り、回想の記に日記の名を選び採ったのは「かげろふの日記」の作者道綱の母であったと思われる。日記の語義の拡大が行われたのである。その道綱の母が作品を形成していく中で、なかば当然のこととして日次の日記に関心を持ったこと、しかしそんな彼女が、「日記に縛られた記述や、日次の日記を敷き写すことなどでは、自分の心情を吐露したり、生き生きとした作品としたりすることができないこと」を悟ったであろうことも、わたくしは述べた⁽²⁾。非日常的な旅の世界に材を取った「土左日記」のような場合でなければ、日次の記の次学作品化はむずかしいし、「土左日記」でさえもきわめて構想の行き届いた作品になっている。

こうした日記文学に触発されて成立しながら、『嵯峨のかよひ路』と『春の深山路』は日次の日記の形を採っている。そしてさらに興味深いことには、旅の記である『無名の記』『最上の河路』『都路のわかれ』は日次の記にはなっていないのである。『無名の記』では

八月十五日

十月ばかり

正月十日あまり

四月つごもり比

が月日記載のすべてである。「最上の河路」に月日の記載はなく、『都路のわかれ』ともなると「すぎにし春のやよひのころより」という起筆と、「八月ついたちの曉ふかくたつ」という都を出立した日の後、道中では日はいつさい書かず、鎌倉に着くとすぐ、

十三日、ふるさとに帰りたいば、

十五日、ほうさうえにて、

十六日、あまりくるしくて、

のように日次の記の体に変わるのである。「春の深山路」では道の記の部分も日次の記になっており——もっとも今見られる写本には十一月十九日から二十三日までが欠けているが、脱落か作者の省略かはわからない——雅有の日記観に変化のあったことも想像されるが、為家から女流日記文学を借りて披見した頃、雅有はかな日記について、道の記はともかくとして、日次の記であると解釈していたのだと思われる。

『嵯峨のかよひ路』も『春の深山路』も、その日その日に書かれたものそのままではないだろう。「嵯峨のかよひ路」には回想の部分があるし、かなり後に記されたと思われる注記もある。「春の深山路」も、九月十九日から「すまれぬたびの道はとかうするに神無月廿六日にもなりぬ」という文で十月二十六日につなげたり、鎌倉へ着いた十一月二十六日の後は「しはすのつごもりの日はしやうじんにて」と十二月末に飛ばしたりなどする筆づかいなど「末の鎌倉

紀行の部分は旅中の覚え書きを後に整理したものであろうが、その時全文に推敲を加えて今の形に仕上げたものと思われる。それは鎌倉の家に帰着した弘安三年の翌春、雅有四十一歳の時のことであろう」という玉井幸助氏説の妥当性を思わせる。暦年によって作品を分けるのではなく、主題によって暦日を区切り、主題にふさわしい題名をつけるなど構想も働いている。「嵯峨のかよひ路」は、為家から「古今集」の秘伝を受けた十一月二十八日で終わっている。為家山荘での学習の終了した以上、この作品はもう続ける意味はない。たとえば「内侍所のみかぐらに」弟の基長と「二人いでんと思へばならしのために」という書き出しで管絃の練習風景が詳しく記されている（十月二十九日）が、当日の記述はない。内侍所の御神楽は十二月吉日に行われるもので、文永六年には何日に行われたかは「史料綜覧」によってもはっきりせず、十二月中旬に鎌倉へと出立した雅有が出られたかどうかもわからないのだが、出席したところで、それは「嵯峨のかよひ路」に記される内容ではなかったのである。そして『春の深山路』にはあの『弘安源氏論義』にかかわる記述がいない。「弘安源氏論義」は弘安三年十月六日東宮の御前で行われたもので、源具頭(14)の記録したものが残っている。「弘安三のとし神無月のはじめ三日のよ」東宮御所に伺候していた侍従三位（雅有）、範藤・兼行・長相らが「しめやかなるよゐの御つれ／＼なぐさむばかり」にはじめた論義が端となって、四日、おのおのが「源氏物語」の不審二種を出しあい、六日論義することが定められ、実施されたのである。この時の雅有の記録が残っていれば興味深い、雅有は省筆している。省略の理由はさだかにしえないが、この源氏

論義が「春の深山路」の構想に組み入れるには大きすぎたことも一因であったろう。

雅有のかなの諸日記が文学作品を志向して書かれたことも確かである。「春の深山路」の、

こまかにはむつかしければかゝらず。人々みなしりたることなり
かし。
(三・二七)

。後に見む人わきまへ待れかし。
(九・一九)

や、「嵯峨のかよひ路」の、前に引いた「みかさの山」についての注記など、読者を意識した記述も目につく。

わたくしのさきに掲げた図示では、雅有の作品は(B)の創作的意図をもって書かれた作品に分類しうる。しかし、と同時に、(A)の本来的な記録としての日記——通常男性は漢文体で書く——の性格をも濃厚に有しているのである。「哥がた」のことを記したかな日記が真名で書くべき「うるはしき事の日記」に対応する形で書かれ始めた以上、それは当然のことでもあった。

遊びの世界に沈淪しているようであっても、『嵯峨のかよひ路』や「春の深山路」に見られる雅有の日々は驚くほど充実していた。過去の日々を回想してまとめ記すよりも、現在の一日一日を書き残すことに雅有は大きな意義を見ていたであろう。そんな雅有らの「われらが生けるけふの日」（徒然草一〇八段(15)）に接しうる魅力がそのかな日記にはある。しかしそれ以上に、日記とは、たといかな書きであっても、日次の記であり、記録であるという考えが、雅有のかな日記の形態を決定させたのであろう。弘安三年十二月つごもりの日、鎌倉の雅有のもとに京より文どもがあった。東宮の御方からの

をまず開けてみると、

右衛門局の文こまかにて、下し後の御日記、御さぐり題のたんざく、下給はる。

雅有の関東下向後の日々を綴った東宮の御日記は、もちろんかな書きで、師雅有の例にならない文学性と記録性をあわせもった日記の日記だったと思われる。文学を好む東宮は師雅有のかな日記執筆をよく知っており、興味と関心も持っていたのであろう。

松本寧至氏は、平安時代の女流日記文学には例の少ない年号の記載が中世の女流日記文学には多く見られるようになることなどから、中世女流日記文学が『とはずがたり』や阿仏尼の作品のような例外はあるが、「私」的な世界から離れ、「公」的なものを受け入れ、取り込んでいった事実を明らかにされ、それが文学性をも薄めていったことも示された。飛鳥井雅有の日記文学についての考えと実践とはそうした風潮ともかわりあう。そこに描かれた日々の充実と、男性のかなの日記の日記という珍しい試みが、その作品を一応成功させてはいるのだが、日記の記から自由になっていたかなの日記文学をふたたび日記に縛りつけたという点で、それは一種の退行でもあったのである。

注1 以下「都路のわかれ」まで四書は「飛鳥井雅有卿記事」の外題で一冊にまとめた本が天理図書館に蔵され、佐々木信綱氏の翻刻（『飛鳥井雅有日記』古典文庫25）もある。以下引用は写本により、句読濁点等を加える。「無名の記」は巻首を欠き、原題不明。佐々木氏の命名。

2 内題「路」を欠く。写本の朱書「路敷」。

3 内題「もかみの河池」

4 内題「みやちのわかれ」

5 写本が宮内庁書陵部に蔵されている。内題「はるのみやまち」。続群書類従に活字化されている（底本は書陵部本でないことは確かだが未詳）が誤りが多い。引用は書陵部本により校訂した。

6 「つ」字写本「は」。佐々木説による。

7 飛鳥井雅有の日記（『日記文学の研究』所収）

8 注1所引古典文庫本 解説

9 飛鳥井雅有の研究——歌人・日記作者・古典学者としての生涯——（立教大学日本文学14 昭和40・6）

10 「すゑ」以下書陵部本に欠く。続群書類従本により補う。

11 12 日記文学史の可能性（日本文学 昭和58・5）

13 群書解題 十一「はるのみやまち」

14 「源氏物語大成」所収九条家本による。

15 中野孝次氏「我等が生けるけふの日」（小沢書店刊）より引用の想を得た。

16 「中世女流日記文学の研究」序論の第二章・第三章